

Title	ヒルファージングとシュトラッサー
Author(s)	大野, 英二
Citation	経済論叢 (1970), 105(1-3): 90-95
Issue Date	1970-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/133380">http://dx.doi.org/10.14989/133380</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第105卷 第1・2・3号

---

Nash 解について……………	瀬地山 敏	1
倉庫問題の解法と最適決定の構造……………	小林 清 晃	24
労働組合主義の理論……………	小 川 登	46
「ビスマルク的国有」下の国鉄「合理化」……………	重 森 暁	66

## 研究ノート

ヒルファードィングとシュトラッサー……………	大 野 英 二	90
PPBS の本質をめぐって……………	池 上 惇	96

---

昭和45年1・2・3月

京都大學經濟學會

## 《研究ノート》

## ヒルファーディングとシュトラッサー

大野英二

ミュンヘンの現代史研究所 Institut für Zeitgeschichte 所蔵の小冊子「国民社会主義とマルクス主義（国会公式速記録によるヒルファーディングの演説）」*» Nationalsozialismus und Marxismus* (Rede (Rudolf) Hilferdings nach dem aml. Reichstagsstenogramm) Berlin, 1932 [以下 Hilferding と略記して引用] は、ゴットシャルヒの作成したヒルファーディング主要著作目録 *» Verzeichnis der wichtigsten Schriften von Rudolf Hilferding*, in: Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, Berlin, 1962, SS. 263-273) のうちに記載されていない。しかし、この国会演説は、1932年5月10日の国会演説でナチ左派の領袖シュトラッサー Gregor Straßer がいわゆる「体制」——ヴァイマル共和制——の批判と同時にナチスの政策路線の展開を試みたのたいて、翌11日にヒルファーディングが反論を行なったものであって、あたかも、1932年7月31日の国会選挙においてナチスが第一党へ伸びあがる前夜に展開されたナチス批判であり、ドイツ社会民主党の理論的指導者として自他ともに許したヒルファーディングが、世界経済恐慌のさなかにおけるナチスの劇的な進出をどのような姿勢でうけとめていたかを知るために示唆をあたえる資料の一つとして、ここにその主要な争点を紹介しておきたいと思う。

この小冊子は、おそらくドイツ社会民主党が宣伝活動を展開するために、国会速記録を上述の標題のもとに印刷に付したものであろう。はじめに簡単な解題が記されており、それによれば、「ナチスのはたりにたいして彼〔ヒルファーディング〕は社会主義の真理を対置した。こうしてこの論争はハーケンクロイツ主義者どもの殲滅的敗北で終わった」という(Hilferding, S. 3. [ ] 内は引用者)。

批判されたシュトラッサーの国会演説もまた「労働とパン」*» Arbeit und Brot!* Reichstagsrede des nat.-soz. Abg. Gregor Straßer am 10. Mai 1932, München, 1932 [以下 Straßer と略記して引用] という標題の小冊子として公刊されている。その内容は、シュトラッサー綱領として周知となったナチスの緊急経済綱領と同一の政策路線を提示しており (Vgl. Gerhard Kroll, *Von der Weltwirtschaftskrise zur Staatskonjunktur*, Berlin, 1958, SS. 426-435), 1932年7月選挙におけるナチスの勝利がこの新綱領に負う

ところがすくなくないと評価されているだけに、シュトラッサーの政策路線にたいしてヒルファーディングがどのような視点から批判を展開したかを検討しておくことは意義のあることと思われる。

ヒルファーディングは、はじめに、世界経済恐慌のさなかにあつて国民所得が激減し、深刻な失業に苦悩するドイツにとって、賠償支払いが不可能であることを指摘したのちに、ブリューニング政府の金本位制擁護を基調とするデフレ政策の路線を全面的に支持する。まもなく、ローザンヌ賠償会議の開催をひかえて、その協議に不利な影響を及ぼさないようにする配慮からも、金本位制維持の必要が強調されているとしても、小冊子の編集者がそこに「二度とインフレを招くな！」という小見出しを挿入しているように、インフレにたいする警戒がドイツ社会民主党の最大の関心事であつた。

ところで、シュトラッサーは、世界経済恐慌のさなかにあつて、従来の「利子奴隷制打破」に代つて、「労働振興計画」を大きく前面に押し出し、ナチスが国家権力を掌握したあかつきにはじめてその労働振興計画に最初の款を入れることが可能となり (Straßer, S. 15)、そうした労働振興計画の金融のために必要な資金のうちの 25%については建設=経済銀行と称する特殊銀行の信用授与にもとづく「生産的信用創造」 (*ibid.*, S. 26) によって調達されることを主張していた。

これにたいして、ヒルファーディングは、恐慌の克服のためには労働振興が主要問題であるというシュトラッサーの主張を一応容認したうえで、積極的な提案としては、労働時間短縮による労働機会の増加と 40 時間労働週の実現とを要求するにすぎない。「われわれは、労働者の連帯に訴えて、目下の緊急時に最も急速に救済せうする方法で諸君の同僚を救済せよ！ というのである (社会民主党側で、まったくその通り！——ナチス側から反対の声)。(ナチスに向けて) 諸君にとって連帯はまったく保持しえない概念であるのだから、諸君がわれわれの主張を理解しえないことは自明のことである (社会民主党側で、ブラヴォー！ および拍手喝采)。それゆえに、われわれがこのような要求を提示するとき、われわれは働く人々と矛盾した立場にあるように、諸君はいう。否、この要求こそ、社会民主党が、犠牲的精神や連帯や共同体意識や理想主義のために、どんなに巨大な教育をドイツの労働者層にたいして行なってきたかを示す (社会民主党側で、嵐のような賛同と拍手喝采)。われわれは失業者を救済するために労働時間の短縮を欲するのである」と (Hilferding, S. 11. [ ] 内は引用者)。ヒルファーディングは、当面の打開策として労働時間短縮による労働機会の拡大を提示し、こうして失業を緩和すべく労働者の連帯に訴えたのであるが、この点はシュトラッサーの国会演説においてすでに、「労働時間短縮はいまや諸君 [社会民主党] の万能薬である」と (Straßer, S. 6)、皮肉られていたところであつた。

シュトラッサーは、労働時間短縮は就業労働者層にとっては16%の賃銀引き下げをもたらし、購買力や労働機会をいささかも増大させるのではなく、労働時間短縮はすでに、主要産業における操業短縮によって、事実上強制された現実となっているのであるから、「諸君によって予言された一切の利点は、失業者にとっての麻醉剤、クロロフォルム麻醉にほかならない」と述べていたのであった (*ibid.*, S. 7)。

ヒルファーディングは、シュトラッサーの労働振興計画になんら目新しい内容が認められないことを強調し、労働振興のために決定的な点は金融問題の解決のうちにあり、シュトラッサー提案の実施はインフレに導くことを批判して、ブリューニング政府擁護の姿勢を明示した。「宰相は今日きわめて懇切であった。諸君〔ナチス〕はインフレを欲していないが、諸君が欲していることは、非常に危険であって、インフレに導くであろう、と宰相は述べた。いや、諸君、私は諸君から、なにが最も純粋のインフレを意味しないのかについて、まだなにも聞いてはいない(社会民主党側で、まったくその通り)。諸君は、証書を発行する銀行を設立しようと欲している。どんな種類の証書なのか? 証書が引き受けられるとすれば、証書は強制公定相場をもたなければならない。したがって、それは新たな紙幣であるだろう。紙幣の流通は増加するであろう。誰もそれがインフレであることを疑わないであろう。誰もが証書から逃避するであろう。われわれは、現物価値への逃避、物価騰貴、要するに、最後には現在の危機よりも遙かにおそるべき危機にいたる結果をとまなうインフレの一切の現象を招くことになるであろう。それが諸君の金融計画であり、それは重大な危険である。なんとすれば、新しいインフレはドイツの事態を救済しないで、国民的ならびに国際的尺度からみて悪化させうるだけであろうから」と (*Hilferding*, S. 14)。こうして、ヒルファーディングは、ブリューニング政府のデフレ政策の路線を支持し、シュトラッサー提案のはらむ危険を衝いたのであるが、焦眉の問題たる恐慌克服のための労働振興計画の推進に堪して、シュトラッサー提案に代る独自の積極的な内容をもつ提案をすることはできなかった。

つぎに、シュトラッサーが提示したナチスの労働振興計画の内容をみるならば、農民経済の救済、内地植民の必要、都市への人口集中の排除などの項目が真先に掲げられており、そこには、土地改良事業や田園都市建設に重点をおくナチ左派のすぐれて農本主義的な志向が看取されうるのである。これにたいして、ヒルファーディングは、1893年2月19日の帝国議会におけるベーベル August Bebel の発言を引用し、全国的な「道路・運河建設および土地改良」の実施を要求する社会民主党の政策路線が大土地所有者の利害によって実現されえないことが批判されている点を紹介して (*ibid.*, S. 11)、シュトラッサーの政策路線がベーベルの発言の二番煎じにすぎないことを諷刺しつつ、同時に、

ナチスの批判する「体制」——ヴァイマル共和制——が内地植民政策にかんして目覚ましい成果をあげてきたことを力説した。「プロイセンにおいて、1919年から1931年までに、480,561ヘクタールに及ぶ42,600の入植者保有地が創設された。それは丁度、大戦直前30年間に、したがって二倍の期間に、当時のプロイセン邦政府がその有名な植民事業でなしとげた成果の二倍である（社会民主党側で、傾聴！傾聴！）。それを現在のプロイセン政府がなしとげたのである。諸君はプロイセン政府にただ猶予をあたえる必要があるだけである。そうすれば、プロイセン政府はこの植民事業をきっと仕上げるであろう。そのときには諸君はプロイセン政府をまったく煩わさなくてもよい（社会民主党側で、太いによし！）」と（*ibid.*, S. 12）。さらに、ヒルファーディングは、食糧自給こそ民族的自立の基礎をなすと主張するシュトラッサーにたいして、そうした食糧自給はすでに現実にみだされていることを指示し、「体制」擁護の立場を前面に押し出した。「この極悪の『体制』が、自明のことであるが現代の科学および技術の進歩と関連して、わが国の農業経済の変革をなしとげたこと、かくして、この体制が、以前のどの時代とも比較されえないような、この進歩への利害関心を農民層のうちに呼び起したこともまた、誰も否みえないものと、私は信じる。諸君、諸君はいま農業輸入において不足する1.5%のためにおそらく体制を変更することを必要としないであろう。迅速に諸君が体制の変更をなしとげることは決してないであろう（社会民主党側で、まさにその通り！）」と（*ibid.*, S. 13）。世界経済恐慌下の共和国政府の農業政策に失望して、広汎な農民層が地すべりのナチ農本主義を支持する運動へくみ込まれてゆく現実にたいして、ヒルファーディングは盲目であるかのごとくにさえ思われる発言である。

さいごに、いわばナチ重商主義とも呼べるべき、シュトラッサーの国内市場重視の政策路線について触れておこう。シュトラッサーは、土地改良事業や荒地開拓を推進するための前提として、農業経営の収益性を保証する必要がある、私的投機を除去するための穀物市場の国家統制や輸入抑制のための貿易統制などによる国内市場の保護と拡大がその条件となることを主張し、農業における労働振興計画の推進を起動力として農業から全産業へ連鎖応応的にモーターを運転させてゆくことを構想していた（Straßer, SS. 19-23）。こうして、シュトラッサーは、国内市場のうちにこそ販路の拡大の可能性が求められるべきであるとする視点から、輸出促進に主力を注ぐ従来の政策路線を非難したのにたいして、ヒルファーディングは、国内市場を保護するための輸入制限は輸出縮小を招来し、失業の増大と国内市場にたいする破壊的な効果をもたらすにすぎないことを指示し、「現在の恐慌のもとで、わが国の輸出を脅かすようなことをなすのは、ただたんにドイツの労働者層にたいしてのみでなく、全ドイツの国民経済にたいする犯罪であ

るだろう（社会民主党側で、活潑な賛同）。……諸君〔ナチス〕は保護関税利害の道具、つまり、真に略奪的な資本家どものあの小徒党の道具にほかならない。諸君の社会主義的ロマン主義は搾取者組織の最も現実的な大資本主義的な利害政策へ転化する（社会民主党側で、その通り！）」と述べた（Hilferding, S. 13.〔 〕内は引用者）。こうして、ヒルファースディンクは、ヒトラーがデュッセルドルフの産業家クラブで演説してティッセン Fritz Thyssen らの支持をうけた事実を挙げて、ナチスが大資本の利害状況に呼応するものであり、シュトラッサーの社会主義的言動は虚像にすぎないことを指弾したのであった。

以上、シュトラッサーの国会演説にたいするヒルファースディンクの国会における反論の内容を、主要な争点をめぐって紹介したのであるが、シュトラッサーが、とにかくにも、ナチスの労働振興計画とその金融方法にかんする提案を中核において恐慌克服のための積極的な政策路線を前面に押し出したのに反して、ヒルファースディンクの反論は、総じて教条主義的な原則論に終始し、シュトラッサーの発想のうちにマルクスやハイネやベーベルの思想からの剽窃があることを論証して、ナチスに思想的なオリジナリティーが欠如する点を衝くことのみ力が注がれており、まさしくナチスの劇的な抬頭によってヴァイマル共和制が崩壊の淵に臨んでいる危機的状況をどのように打開すべきかについてなら具体的な指針を提示していない。

しかも、ヒルファースディンクが、シュトラッサーの剽窃を指示しつつ、「シュトラッサー氏がこのようなマルクスの思想を、従来われわれのアジテーションが幾分近づき難かったサークルで普及させたことについては、シュトラッサー氏に謝意をあらわさねばならない（大いによし！ 大哄笑）」と述べている点は（*ibid.*, S. 8. 傍点は引用者）、看過されえない。ナチスがドイツ社会民主党やドイツ共産党が捉えることができなかった社会層、なかんずく農民層や手工業者層をはじめとする広汎な中間的社会層に共鳴盤を見出し、そこにまさしくドイツ・マルクス主義の悲劇的運命が招来される深刻な岐路が伏在していたのであるが、そうした深淵に臨んでいることについての危機感はまったく認められないように思われるからである。

これとは対照的にシュトラッサーは、「諸君は、ここ国会のなかでがいしてまったく心地よさそうに、のんびりと坐っている。諸君はずっとまえから、国会のそとでドイツ民族のうちに思考のどのような成層が生じているかについて、もはや気付いていなかった」と述べて（Straßer, S. 29）、政治は「予見」であるのに、ドイツ民族はこの数年来いつも「追認」する政治しか経験しなかったと指摘しており（*ibid.*, S. 30）、世界経済恐慌のさなかに激動する状況に巧みに対応してその触手をのばしてゆこうとする姿勢が、そこに看取されるように思われる。

もとより、ナチスが経済的自由主義に反対すると同時に、人格的自由や人格的自律や良心の自由を蹂躪するのとは異なって、ドイツ社会民主党は、経済的自由主義を否定する立場にたっても、かつて自由主義が市民層の光輝ある時代に生み出した人類の貴重な精神的遺産を継承するものであることが強調され、「われわれは、全世界の自由主義の偉大な戦士、偉大なフランスの啓蒙主義者、偉大なドイツの哲学者カント、フィヒテ、ヘーゲルのごとき人々の嗣子である（社会民主党側で、ブラヴオー！ および拍手喝采）」とヒルファーディングが述べる時（*ibid.*, S. 9）、さすがに傾聴に値する重みを感じさせるとしても、ドイツのシュタートゥス・クヴォーが直面している陰路を切り開く政策路線の対決という地平から吟味するならば、果たしてヒルファーディングの批判によって「ハーケンクロイツ主義者どもの殲滅的敗北」がもたらされたのであろうか。

「諸君は（ナチスに向って）恐慌によって生きている。恐慌がこれらの多くの資本主義的中間諸階層にひき起した混乱によって生きている。われわれは理性に訴え、かつ、われわれが勝利することを確信している。なんとすれば、偉大なのは真理の力であるのだから。真理は貫ぬかれる！（社会民主党側で、活潑な鳴りやまない拍手喝采）」と、ヒルファーディングは国会演説を結んでいる（*ibid.*, S. 16）。しかし、歴史の軌道は第三帝国へと転轍されてゆき、ウォイトエンスキー Wl. S. Woytinsky が回想するように、歴史はヒルファーディングをヴァイマル共和国の墓掘り人夫に選んだのであった（『歴史を生きる』〔2〕直井武夫訳、論争社、1961年、316ページ）。「真理」はついに貫ぬかれることはなかった。われわれは改めてここに、「真理は具体的である」というあのレーニンの冷徹な言葉（『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』『レーニン全集』第9巻、マルクス＝レーニン主義研究所訳、大月書店、1955年、80ページ）を想起せざるをえない。